



Title	18-19世紀ベトナム・タイバック地域ターイ (Thai) 族社会の史的研究
Author(s)	岡田, 雅志
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59387
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	岡田雅志
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第25328号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	18-19世紀ベトナム・タイバック地域タイ(Thai)族社会の史的研究
論文審査委員	(主査) 教授 桃木 至朗 (副査) 教授 荒川 正晴 教授 片山 剛

論文内容の要旨

本論文は、中国南部からインドシナ半島北部の山間盆地群にひろがった「タイ文化圏」の一角を占める、ベトナム・タイバック(西北)地方のタイ族(黒タイ)が形成したムオンと呼ばれる政体・社会に焦点を当て、その近世後期から近代にかけての変動を研究したものである。従来ともすれば「国民国家ベトナムの辺境」とのみ認識され、また南中国の研究と違って民族学・文化人類学の独擅場の様相を呈していた当該社会に、歴史学の立場から斬り込もうとした点に、本論文の新しさがある。方法としては、ベトナム語と漢文だけでなく黒タイ語、ラオス語、タイ語など多言語の史料を博捜し、また文献とフィールドワークとの組み合わせによって生態環境やモノと生業、権力と人の移動・エスニシティなどを総合的に解明するという、日本の東南アジア地域研究が誇ってきた方法論を用いる点に、大きな特徴がある。

本論文は序章・終章と本論3章からなる。まず序章では、タイバック地方の概要と周辺各国にまたがる史料状況、先行研究などについて、単なる前置きにとどまらない総合的な紹介をおこなったうえで、当該時期に関する「低地の国家に一方的に呑み込まれてゆく時代」「孤立した少数民族の伝統的世界が存続していた時代」の両極端のステレオタイプを批判して、歴史過程の実態を解明する必要性を訴える。続く第1章では、当時のアジアで最大の生産量を誇ったとされ、貴金属と貨幣が重要な役割を果たした18世紀東アジア史上に

において名高い聚隆銅山を取り上げて、そこでのタイ系首長の役割と、開発による在地社会の変容をあとづけた。ベトナム王朝国家と華人労働力・商人を利用して自己の権力・権益を拡大する首長黄氏の姿、19世紀に入ると鉱脈の枯渇や鉱害、ベトナム阮朝の干渉などで生産が減退し、それとともに首長権力も衰えてゆく様子などが活写される。第二章では北部ベトナム山地のもうひとつの主力商品で長崎にも大量輸入された肉桂を取り上げ、黄公質が支配した時代を中心に、ムオン・ティン(ディエンビエンフー)政権の消長を、肉桂を中心とする内陸交易と関連づけながら論じたものである。19世紀に入るとここでも阮朝の干渉が強まるが、銅生産とは対照的に肉桂生産は持続したことが、集荷・販売方法に関する史料などを通じて示される。

第3章はタイバック・黒タイ族の最初の入植地とされるムオン・ローを取り上げ、阮朝の地籍(土地台帳)などの史料を使って、人類学者が黒タイ社会の典型として描いてきた、中心の大ムオンが2つの従属ムオンを支配するというムオン・ローの「伝統的」内部構造を再検討する。執筆者によれば、もともとムオン・ロー盆地には、内部を流れるシア川の上流部と下流部に、おそらく水利を基盤とする2つの権力が存在したが、そこに華人が進出して三極構造ができ、しかも阮朝権力や商業発展を利用して外部から乗り込んだ首長琴氏の支配が確立することにより、19世紀に新たに成立したのが、かの「伝統的」構造である。最後に終章では、各章の内容をまとめた後に、18-19世紀の当該地域社会が「孤立」などしておらず、東アジア・東南アジア世界と連動しながらダイナミックに動いていたこと、独自権力の「衰退」にも低地権力の伸張以外にさまざまな環境・経済要因が働いていたこと、以上を通じてはじめて現在につながる文化・社会構造が成立したことの3点を主張する。

論文審査の結果の要旨

本論文は直接には、地域研究の方法によって3つの地域の事例研究をおこなったものだが、その成果は、ベトナム・タイバック地方のタイ族固有の歴史的経験自体を多面的に明らかにしたこと自体が興味深いだけでなく、多くの問題領域へのひろがりをもっている。序章は、先行研究が少ない分野の論文で幅広い読者にその重要性や研究動向をアピールするという面で、模範的な書き方をしているし、モノを切り口とした1・2章は、アジア海域や東部ユーラシアの交易と貨幣、19世紀初頭の世界経済の構造転換、それらにおける山の世界の位置づけなど学界のホットなテーマにつながることを、著者もよく理解している。第3章は、ベトナム文書の開拓や文化人類学との格闘といった、方法的側面での新しさが見逃せない。各章の考証は、タイ族自身が書き残してきた「歴史」の成立についても示唆する点が少なくない。今後はとりわけ、リーバーマンや林満紅らが巻き起こした19世紀前半の経済・社会構造や自然環境の大転換に関する世界的論争に貢献するような、議論の広がりが大いに期待される。

ただし本論文には、締め切りに追われてか推敲不足・説明不足の点が散見する。鉱山を焦点とする商品経済の拡大、水利と関連したムオン農業社会のありかた、阮朝の干渉の具体的方法や制度とその背景などについて、議論を深めるべき点も残っている。しかしそれらは、きわめて新しいテーマに野心的に取り組んだ本稿の達成全体をそこなうものではない。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。